

富士見市の湧水

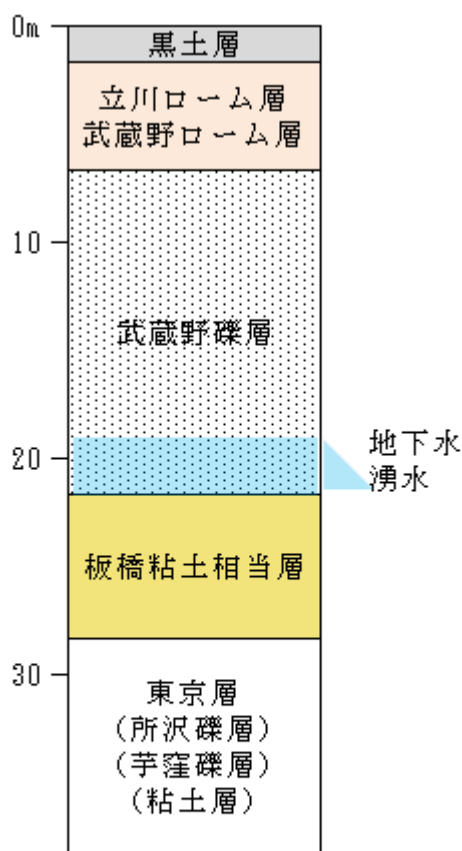


図5 富士見市内の台地の地層模式図
(富士見市史 上巻)
に地下水・湧水を書き込む

富士見市の土地は、地形の上から「武蔵野台地」と「荒川低地」という高低二面からなる地形要素からなっています。

そして、この台地は、南西から北東に流向する小河川（北から砂川堀、富士見江川、柳瀬川）によって穿孔され、台地の輪郭部は複雑に入り組み、**急崖面ではローム層下の礫層から湧水**が多く見られます。

※ローム層とは火山灰層

明治14年東京大学にきていたドイツの学者が、構内の土壌を見て氷河によるものと考えて「砂混じりの埴土」と言う農業用語を適用しました。その後の研究でマグマの結晶した鉱物が入っているので、火山灰であることが分かりましたが、ロームという言葉はそのままひきつがれました。

① 富士見市内の湧水の昔・今

最近、開拓により斜面林の減少、道路のアスファルト化、雨水の下水道への誘導などにより湧水が減りつつありますが、市内では、現在でも湧水を30ヶ所ほどの場所で見ることが出来ます。

■（その一）特に富士見江川沿いは豊富な水が湧き出し、この水を利用して江戸時代から水車による製粉がおこなわれてきました。また、江川の上流にあたる丸池にはその名の通り大きな池があり、かつては江川の水源として下流の水田を潤していましたが、埋められて姿を消してしまっています。

富士見市ホームページ「観る・楽しむ・学ぶ」⇒「市内のみどころ」⇒
歴史探訪『ふじみ・発見!』No. 12…「関沢の水車」より全文引用

市内には、江戸時代後半頃から昭和初期にかけて、富士見江川・権平川・砂川堀に沿って水力を利用して米や麦などを精穀・製粉する「くるまや」と呼ばれる水車屋がありました。水車に関する記録で古いものでは、天明4年(1784年)に水子村に置かれていた水車が鶴馬村の関沢に移るといふ古文書が残されています。

湧水の恵み

関沢には、かつて丸池をはじめ崖下にはいくつもの湧水地があり、その豊富な水量は農業用水や生活用水に利用されていました。富士見江川に沿っては、「上の水車」「中の水車」「下の水車」と言われた3か所の水車がありました。富士見江川から引き込んだ鶴田用水からさらに分水した水車堀といわれる専用の水路に水車小屋が設置されました。中の水車では、つき白が15あり、主に大麦をついたり、小麦を粉に挽いたと言われています。水車の直径は1丈7尺(約5メートル)ほどのもので、その回転が大きな歯車から小さな歯車へと伝えられ、杵や臼を動かす動力となっていました。

また、上の水車は三芳町上富方面、中の水車は鶴馬村と水谷村、下の水車は鶴馬村と南畑村からの利用者が多かったようです。



昭和35年の鶴田用水(現こぼと保育園付近)
星野広興氏蔵



「下の水車」の歯車

江戸時代から続いていた水車業も、昭和に入ると水量の減少や電気の普及により衰退し、最後まで残っていた中の水車も昭和20年4月の空襲によって破壊されたため廃業してしまいました。



現在の鶴田用水(下の水車付近)



鶴馬・関沢の水車跡

※湧水を活かした水車は江戸から昭和の時代にかけて、関沢の水車だけでなく、他にもありました。

・・・市内の水車は明和～安永（１７６４～１７８０）頃の創業を最古に、関沢の富士見江川から水をひいて３ヶ所、権平川から２ヶ所、砂川掘から３ヶ所と計８ヶ所ありました。湧き水という安定した水源の他、稲作地帯と畑作地帯をひかえた地の利を得た産業だったからです。昭和初期から動力による精米や製粉が普及しましたが、昭和２０年（１９４５）４月の米軍による爆弾で破壊され、最後の水車も廃業を余儀なくされました。

■（その二）水子の台地末端の崖下の礫層中から各所で湧き水が多く、「みずこ（水処）」として水子の地名の由来ともいわれています。

富士見市ホームページ「観る・楽しむ・学ぶ」⇒「市内のみどころ」⇒

歴史探訪『ふじみ・発見！』No. 3 1・・・「水子・針ヶ谷地区」より「水に関わる地名」貼付

水に関わる地名

地名には、その土地の状況を表す文字が付けられている場合があります。例えば水に関わる地名では、「水」「川」「河」「池」といった水そのものを表す語や、海岸や半島などの水辺を表すものには「浜」「崎」「江」などの語、ほかにも滝や汐などの「さんずい」がつく語、水が流れる低い土地では「谷」「沢」といった語が付くことがあります。

市内にも「谷」や「沢」の文字が付けられた地名が多くありますが、水子地域を見ても「神井戸」や「大井戸」など水の湧く場所には「井」「井戸」の語が付くことがあり、ほかにも「石井」「土井」など数多く認められます。こうした土地では湧水や川などの水が出る場所が近くにある場合が多いものです。「水子」という地名に「水がある処」という意味が含まれているのも、こうした周辺の地名からもうかがえます。



水子に所在する湧水地点(神井戸)



石井の湧水地点



■（その三）針ヶ谷の低湿地は、富士見市で湧水を活かした稲作の発祥の地と考えられています。

紀元前3世紀、北九州に伝えられた稲作が、弥生時代の中期後半、針ヶ谷にも伝わり、南通遺跡（針ヶ谷小学校敷地）に居住した縄文人が低湿地に降りて、谷あいや沼田に種粃を直播きしていたと考えられ稲作発祥の地と言われています。遺跡近くには、水量豊かな湧水もあって水涸れの心配のない土地でした。米は長さが短く、丸みを帯びた、現在の日本型と同種でした。昭和46年（1971）ころから始まった浦所バイパス工事により、低湿地は跡形もなく無くなりました。

■（その四）市内崖近くの田んぼで、湧水が真下から盛り上がるように湧いていた田がありました。

その湧き出しているようすが、釜の湯が煮えくり返っているのと似ていたので「釜（かま）」といい、かまのある田を「かまっ田」と言いました。その穴径が大きいのは10cmもあったと言ひ、地下水の豊富だった昔が偲ばれます。今でも富士見江川の上流や湧水池でも、砂がゆれる程度のごく小さいものが見られることがあります。

■（その五）湧水との関連が深い地下水について、郷土富士見検定問題集より
富士見市の水道水は、荒川から取り入れられた県水と市内の井戸水を使っているが、その比率はどの位か。

・・・富士見市の水道水は荒川から取り入れられた、埼玉県大久保浄水場の県水を約80%受水し、残り20%は市内7ヶ所の井戸水を使用しています。浄水場の東大久保浄水場・南畑浄水場・水谷浄水場や鶴瀬西配水場を経て工場や学校、病院、そして多くの家庭に届けられています。

②富士見市内の湧水に関するその他情報

■（その一）冬季の湧水の水温

夏は冷たく冬は暖かく感じますが、冬期の湧水の水温は何度くらいでしょうか。水は長い時間をかけて地中を移動しています。その間に地熱の影響を受けるので、季節に関係なく水温は15度くらいに安定しています。しかし大雨が続いて、湧水量がふえるような時は、外気の影響をうけるようです。

※この湧水の水温の特性を利用して、市内数ヶ所で鯉の養殖がおこなわれていました。鯉の養殖に湧水を使うと、絶えず新鮮な水を注入することが出来るので、狭い所で大量に飼育しても酸素不足もなく、アオコの発生もありません。特に冬場は約15度という水温を維持できるので、氷の下で休眠状態に入ることなく餌を食べるので、

発育が良かったと言います。しかし夏場も水温が約15度なので、温かい方が餌を良く食べるため、少しでも温度を上げようと注水量を加減したり、温めておいた水を加えて発育を助けたようです。

■（その二）湧水の硬度

ミネラルウォーターは、カルシウムとマグネシウムを含んでいることを強調した水の事です。1リットル中に80mg含まれていれば、硬度80といいます。国内の水は硬度100以下なのですが、輸入品になると、硬度500とか1500というものもあります。

市内の湧水は硬度50～100がほとんどです。硬度を用途で分類すると、100以下は軟水、100～200を中水、それ以上を硬水といいます。

■（その三）市内の湧水池のかたわらには今も水神が祀られています。しめ縄やお供え物もあり、先人の思いが引き継がれていますが、一番多く祀られている水神は弁才天です。

弁才天はインドのヒンズウ教の神で、もとは河川の神格化といわれ、農業や食物の豊穰（ほうじょう）の神でした。仏教に採り入れられると、せせらぎの音から心をいやす音楽・学問・芸術・雄弁の神となって、妙音天・美音天などと呼ばれました。奈良時代に仏教と共に中国から伝えられ、鎮護国家・芸術・農業の神として広まりましたが、室町時代ころからは、豊穰は富をもたらすことから、弁財天と書いて七福神の一員に加えられ、江戸時代の流行神となりました。

市内には水神33基がのこされていますが、湧水池のかたわらに一番多く9基の弁才天（弁財天）が祀られています。

富士見市ホームページ「観る・楽しむ・学ぶ」⇒「市内のみどころ」⇒

歴史探訪『ふじみ・発見!』No. 21…「水と蛇」より「弁才天／蛇身像」貼付

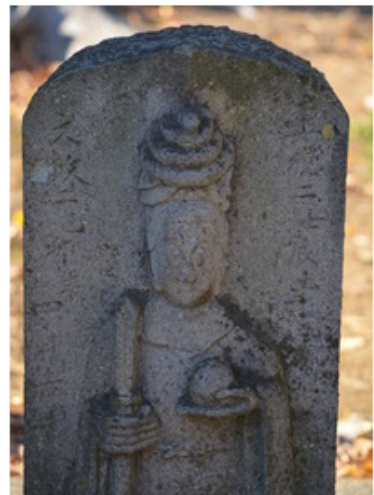
弁才天／蛇身像

湧き水や池・川などの水辺には、水神として弁財天がまつられていることがよく見受けられます。

蛇は弁財天の使者とされていることから、蛇の姿をした人頭蛇身の像や、頭上に蛇を刻む弁才天像が社や祠にまつられています（右の写真は、東大久保・阿蘇神社境内にある「頭上に蛇を刻んだ弁財天像」）。

市内には30近い数の湧き水があり、弁才天像も水子・鶴馬・南畑それぞれに10基近い数が確認されています。真夏でも枯れることのない清水の豊富な水子地域はもちろん、鶴馬には七沢八寺の言葉があるように、かつて沢から清水が湧き出ている場所が多かった地域です。また南畑の水田地帯では、水神としてだけでなく五穀豊穰の神としてもまつられたと考えられます。

その中でも、蛇身の姿をしたものは市内に2か所あり、ひとつは諏訪水川神社脇にある雲居の瀧と呼ばれる湧水地の傍らにある弁天社、そしてもうひとつは水子の石井緑地にある弁天社です。ここも湧水地としてかつては豊富な水量を湧出していました。こうした社や祠には、蛇の好物である卵をお供えているところや、蛇にまつわる昔話が残っているところもあります。





湧水池にある弁財天をまつる社
(水子性蓮寺近くの江嶋神社)



水子石井の蛇身像

③湧水池で見られる水生生物

■ (その一) ヘビトンボ

市内の湧水池で見られるヘビトンボの幼虫は、ムカデのようにも見えますが、清流の石の下に潜んで大きいあごを使って水生生物を捕食します。

この幼虫を黒焼きにしたものは「孫太郎むし」といって幼児の「かんのむし」の妙薬でした。羽化すると羽は透明で脈が多くトンボに似ていますが、たたむと蛾(が)のように見えるので、変なトンボからヘビトンボになったとか、頭部はトンボに似ていても、首が異様にながいのので、ヘビトンボになったという説もあります。

■ (その二) アメリカザリガニ

市内の湧水池で水生生物を食い荒らしているアメリカザリガニは、養殖していた食用カエルの餌として輸入したものです。

渡米した人たちは、日本人の体の小さいのは動物性蛋白質の不足と指摘して、短期間の実践法としてアメリカから食用カエルを輸入しました。ところがカエルは生きたものしか食べないので、飼育に苦慮しており、アメリカザリガニを輸入してえさとして、養殖は成功しましたが、カエルを食べる人はほとんどおらず、事業は失敗し放置されたりしました。逃げ出したアメリカザリガニは順応性に優れ日本中に広まりました。市内の湧水池でも繁殖し、水生動物を食い荒らします。

■ (その三) プラナリア

市内の湧水池やその溝にいる、プラナリア(ウズムシ)は、体長5～10mmくらいで浅黒く体はナメクジを平らにしたようで軟らかい。

頭部上面に二つの黒い点が明暗を識別する働きをします。普段は清流の石にへばりついて体の中ほどにある口を開けて獲物を食べ排泄も口からします。石の上を滑るよう移動し、成長すると体がくびれて二匹になります。人工的に二つに切れば二匹に

なり、縦長に切れば細長い二匹になるなど、優れた再生能力は医学の分野でも研究の対象になっています。

■（その四）カワモズク

市内の湧水池やその流れで、埼玉県の絶滅危惧種に指定されている水生植物（藻）が発見されており、きれいな水の証しでもある植物です。

カワモズクは淡水の藻です。11月から4月ころの寒い季節に多く、湧水から流れ出す清流の砂地底や石などに生育します。藻体は茶褐色、アオモズクは美しい濃緑色で、両種が発見されました。直径3mm長さ5cmほどのビロードの紐状のものが7～8本が固まって揺れていました。顕微鏡で見ると細かい枝が網状に一つの輪をつくり、それが茎に等間隔に連なって一本の藻体となり、表面は厚い粘液質で保護されています。

■（その五）アメンボウ

市内の湧水には「アメンボウ」が多く生息しています。産卵は、雌は雄を乗せたまま水中に潜り、水草の茎に黄白色の細長い卵を20個ほど列状に産みつけます。卵は10日ほどでふ化し、幼虫はすぐ水面に出て成虫に混じって落ちてきた昆虫の体液を吸う捕食活動を行います。5回脱皮して成虫になり、冬は陸に上がって落ち葉の下で越冬します。冬越しした成虫が初夏に産卵したものは羽が短く、初夏に産卵して夏に生育したものは羽が長く、飛んで移動します。その時は、足はだらりと垂らしたままです。

④現在、市内で見られる主な湧水場所

市内では、現在、湧水を30ヶ所（個人宅の湧水場所も含む）ほどの場所で見ることが出来ます。

■湧水の見られる主な公園

①親水公園（関沢）



②石井緑地公園「どんぐり山」 （水子）



③栗谷津公園（針ヶ谷）

平成18年（2006）の調査によると、市内にある湧水池で、最も湧水量の多いのが針ヶ谷の栗谷津公園。1分当たり約380リットルを記録しました。湧水量の増減は降水量によりますが、これまでに涸れたことはありません。



④谷津の森公園（鶴馬）



■公園以外で湧水の見られる主な場所

①諏訪 1 丁目の氷川神社脇の谷間



②水子の性蓮寺裏・・・「おいど」



③神井戸



④別所水神



⑤来迎の泉

現在の鶴田用水（上の水車～中の水車～下の水車を流れている用水）の来迎寺下に
あります。



■難波田城の井戸水

富士見市の代表的な湧水として「江川親水公園」、「石井緑地公園」、「栗谷津公園」と「難波田城の井戸水」があげられます。

＜ここから流れた水は左右に別れ、右は池へ、左は田んぼに流れています＞



記載日：2014/3/2

この内容は、「富士見市史」、「郷土富士見検定問題集」、「ふじみ学入門 郷土検定・問題解説講座」、「ふじみ広報」から抜粋し、引用させて頂いております。